# 東日本大震災から被災地はどう再起動しようとしているのか

## ―最前線・気仙沼の歩みに学ぶ、まちづくりの本質と地域の産業・生活・文化

2017年11月8日(水) 午後4時～6時
大阪ガスビル(南館) 3階 会議室

**外に学び、過去と現在をつなぎなおし、未来に向けて都市・地域の本質的価値をルネッセ(再起動)するために、具体的なアイデアを議論する。**

〈第1部〉問題提起

## 「311から6年」を歩いて感じたこと

**池永寛明**
大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所 所長

### 1 何が変わり、何が変わらなかったのか?

**◇陸前高田 ―真っ暗な夜、信号だけが煌々とともる**

陸前高田の高田町では、6人に1人の生命が失われた。鉄筋コンクリートビル以外はすべてが流され、まちはなくなった。山が切り崩され、ベルトコンベアで土砂が運ばれ、まちがかさあげされている。14mの盛り土を縫う道も日々変化している。夜のまちにともるのは信号だけ。

**◇あの日、どこに逃げ、どう動いたのか?**

市民体育館に500名がまず避難した。そこで遺体として発見されたのが50名。犠牲者が発見された場所がどこかはわかるが、その日、巨大地震と津波に対して人々がどこをどう動いたのかをつかむことが大切だが、それは今もわからないまま。

**◇地域の記憶の「しるし」を残す**

山にある社寺は、有事に逃げる場所でもあった。「過去の災害の津波の高さを石碑などで“しるし”をつけ、訓練をおこない災害を追体験し、日常レベルにおとしこみ、自分ごととして地域全体で身につけてきた」。海に近い小・中学校では常に訓練してきたと言う。

**◇伊達藩の気仙地方にいた「気仙大工」**

高度な建築技法をもった大工集団は東北・関東・蝦夷地に、多くの建物とともに「気仙文化」を広げた。この地に「気仙大工左官伝承館」をつくり、311後も後世に伝えようとしている。

**◇希望の灯り―神戸117から陸前高田311へ**

伝承館にある「希望の灯り」の火は、神戸から送られた。また、巨大津波に流された陸前高田の松に、近畿25ヵ寺で5000人がノミを入れた「あゆみ観音像」がまちを見守る。お堂をつくったのは京都の大工集団「三角屋」の三浦史朗さん。

**◇地域産業が復活しないと、地域の復興はない**

工場のみならず醤油の生命「もろみ」もすべて流された八木澤商店の八木澤会長は、「地域産業が復活しないと、地域は復興しない」との信念で工場を復興し、それにつづき、岩手大学と立教大学による「陸前高田グローバルキャンパス」を実現した。

**◇気仙沼 ―まち全体がサーキットのピットのよう**

今回のゲストの吉田千春さんから、気仙沼に漁船が入港すると、まち全体で様々な産業が一斉に動きだすとお聴きした。気仙沼は津波火災を乗り越え、長年培われた漁業技術とサポートシステムにより、生鮮カツオの水揚げ21年連続日本一を死守した。

**◇タクシー会社が「入港船カレンダー」を発行**

気仙沼観光タクシーは、気仙沼湾に入港する船名が並ぶカレンダーを発行する。震災後の沈滞するまちを元気づけるため、魚のイラストを描いたタクシーを走らせるのは、立命館大学出身の宮井社長。

**◇購読率9割の地元新聞があるまち**

気仙沼では、新聞が届けられたら、まず裏面の『ご葬儀告知』、次に1面の『水揚げ情報』、そして『漁業通信』を読むといった地域が産業でつながっている。被災という“共通体験”によって、周りの人の力を借り、助け助けられる空気がより高まった。

**◇石巻 ―「6年でやっと食材が戻った」**

こう語るのは、石巻の旅館「峠の湯 追分温泉」の横山館主。この旅館に311後、地域の人が避難してきた。横山さんは被災者や復旧・復興応援者のために、市場と漁師を訪ね、食材を探しつづけた。

**◇名取 ―「文化」をもったまちが最後に残る**

巨大な波に呑みこまれた名取市。市の幹部は語る。「人口を増やすこと、人口が減るのを止めることが、まちの存在理由ではない。最終的に残るまちは、文化をもったまちだ」と。被災地を見渡せる日和山には、津波で流出した神社が祀られた。

**◇復興は、スポーツ選手の怪我の治し方のように**

スポーツ選手が怪我をした場合、種目や怪我の部位、症状により治療法はちがう。種目によって肉体・筋肉の鍛え方が異なる。選手のレベルによっても快復状態がちがう。つまり地域ごとに復興の仕方は異なるはずだ。一律に考えるべきではない。

### 2 地域再起動に向け、私たちにできることは?

地域の地形・地理、地域ならではの産業・商業に、地域の歴史、地域文化が掛け合わされことによって、地域として目指していくべきことが明らかになる。

地域が本来持っていた「本質」を掘り起こし、内から外から新たな情報を集めて掛けあわせることで、新たな価値がうまれ、地域が再起動できるのではないだろうか。





〈第2部〉ゲスト講師によるレクチャー

## 他力本願社会のレジリエンス

**～東日本大震災から6年9カ月。高齢化地域を「どう育てる!」**

**吉田千春氏**
気仙沼市・鹿折まちづくり協議会
地域活性化支援員

(よしだ・ちはる)
1971年気仙沼生まれ。平成15年に「生きること」をテーマに任意団体を立ち上げ、40歳で東日本大震災を経験、支援活動に従事する。平成23年、手仕事で女性を支援するプロジェクトを開始。同年から5年間、宮城県震災復興情報発信局記者。平成29年4月から現職。

### 1 気仙沼市・鹿折の復興まちづくりの現場から

私が生まれ育った気仙沼の鹿折地域では、高齢化がとても進んでいて、このため、地域をどう復興するのかよりも、むしろこれからどう育てていくのかに、今は懸命に取り組んでいます。

**◇震災後に生まれた公営住宅団地**

鹿折地域は、東日本大震災で、まち全体が火事に晒されました。漁業用に保存されていた大量の油が、津波で流されてきて、引火するなどして起こったものです。

鹿折地域では、震災後に区画整理事業が進められて、今は気仙沼市で最大の公営住宅団地もつくられました。全体で284戸で、現在205軒が入居。住民のうち、65歳以上は約65%にのぼり、そのうち約20%が85歳以上の独居者です。今年10月29日に、この公営住宅でも、ようやく自治会を立ち上げることができました。自治会長は86歳の男性です。

**●気仙沼はこんなところ**

宮城県最北端の気仙沼市は人口約6万6000人で、高齢化率は36.7%。沿岸はリアス式海岸を形成し、三陸沖の豊かな水産資源を追って全国から漁船が集まってくる。海と山と川、水と緑に恵まれ、同じ市の中でも地域によって気候や暮らし方が異なり、地域ごとの文化を大切にした暮らしが評価されて、日本で初めて「スローシティ」に認定された。

### 2 漁業を基に成り立つ気仙沼の暮らし

震災後、気仙沼では平成23年5月に魚市場を再開。関係者の懸命な努力で、今年も鮮カツオ水揚げで21年連続の日本一を守りました

**◇気仙沼の基幹産業は漁業です**

カツオ船が沖から入ってきて魚市場に着岸すると、F1のピットのように港機能が動き出すのが特徴的です。1艘の船に、油を積む船、食事を積む船、エサを積む船というように、いろいろな業者が寄ってくる。関連の様々な業種が一斉に回り出して、気仙沼のまち全体の産業が潤っていきます。

**●気仙沼で営まれる多様な漁業**

**【フカヒレ】** ヨシキリザメからとるフカヒレは品質世界一と称され、生産量でも気仙沼は日本一。

**【ネズミザメ(モウカザメ)】** この魚の心臓を血抜きして刺身で食べる。

**【メカジキ】** 触先から電気の線がついた銛で突いて獲る漁法。

**【マグロ】** 遠洋漁業のマグロ船も気仙沼から出航する。一度出ていくと、次の帰港は1年半から2年後。

**【スルメイカ】** 沿岸漁業。夜間に集魚灯をつけ群れを集めて一本釣りする。

**【サンマ】** 小さい船は7月に港を離れ、ロシア海域で漁をし、8月には大型船が出ていく。

**【養殖漁業】** カキやワカメやコンブのほか、ホヤやホタテの養殖も行われている。

### 3 海とのかかわりが深い気仙沼の生活文化

海の仕事は重労働でひとりではできないもの。昔から、男の仕事とされてきました。女性は、お弁当をつくるなどのサポートはできても、船の仕事に関わることはできないのが、土地の習わし。その理由は、船の女神がヤキモチを焼くからというのが理由らしいです(笑)。

**◇神仏を重んじる私たちの地域**

私たちの地域ではとにかく神仏を重んじます。また、お供えには餅という文化があり、震災前までは、年に10回ほどお餅を搗くなど、独特の食文化が受け継がれてきました。

**●気仙沼の季節の風習と食文化**

**【正月】** 家の神棚は、1畳ほどの大きさ。お正月には前の棚に、心臓を表した「星の玉」のほか、松竹梅、えびす、大黒、宝船など7枚の紙を貼る。透かし状で魚の形の「きりこ」は大漁を願って飾り、神棚の上の注連縄はエビの姿を表す。

神棚には必ず御膳を供える。1月1日はお精進で、野菜と餅が上がる。2日は餅料理で、3日も精進料理。4日は4本足のものを食べない。5日もお精進。6日はお薬師さまで、7日は七草。

**【小正月】** 小正月では、ミズキの枝に餅と飾りを付け、神棚と仏壇に飾る。この時期、お正月の餅を吊し、乾いたらかき餅にする。20日小正月明けには、ミズキにつけた餅を小豆粥にして食べる。

**【端午の節句】** 旧暦5月5日。菖蒲湯に入り、柏餅を神棚と仏壇に供える。

**【盂蘭盆】** 8月7日は初盆で、四十九日「満中陰」が過ぎて新盆を迎える方の仏前参り。ここから20日までの間はお見舞いなども控える。8月12日は盆町で、お盆用品を購入。13日はお精進揚げ。14日は、灯(あかし)たてて、新盆の方のお墓から自宅まで灯りをともす。16日は藪入り。20日は送り盆。このとき、盆棚に「はっと」(小麦粉を水で練って茹でたもの)を供える。

**【十三夜のお祝い】** 十三夜(旧暦9月1日)は「大根の年越し」と言われ、精進料理をつくって豊作に感謝し、神棚と仏壇に供える。豆もとれる時期で「ずんだ餅」もつくる。

**【恵比寿講】** 旧暦10月20日。恵比寿さまのお膳に海底にすむ魚、エゾアイナメを供える。気圧が低い地上では内蔵が口から出ているので、腹中がきれいな魚、「財布さかな」とも呼ばれる。

**【冬至のカボチャ】** 12月になると「渡し粥」。カボチャと米と小豆とを入れた甘いカボチャ粥を食べて冬至を過ごし、お正月を迎える。

お盆に仏壇に供える「はっと」は、ひし形に切ってきなこをまぶした「ほろぎばっと」。同様のものでも、農作業のときに食べるのは「せながでばっと」で、普段のおやつのときは「きなごばっと」と呼び分ける。餡子に通すと「あずぎばっと」。汁に煮込むと「はっと汁」。

### ◇おむすびの形から見えてくるもの

昔ばなしの「おむすびころりん」の絵本でも、最近は三角おむすびが多いようです。うちのおむすびは丸型でした。

ふと感じた疑問に、吉田家のいとこたち40人にヒアリングしてみました(笑)。まず、「お母さんのおむすびの形は?」との問いには、ほぼ全員が丸で、三角はわずか。同じ質問を友人に尋ねても同じ傾向。でも「自分でつくるのは?」では、男性は三角と丸が半々で、女性では今は三角が多くなっているのがわかりました。

私の祖母のおむすびは丸でした。つくり方は、どんぶり2つにご飯を詰め、合わせて上下に振り固めます。それに海苔を2枚貼り付ける。そのおむすびを祖母はいつも船に持たせていました。

子どもの頃に「なぜこんな形?」と尋ねたら、「重労働する人への思いやりだよ」と。また、「置いたときに崩れないおむすびをむすべないようでは、女性としては一人前でない」、そう言われて私は育ちました。

お弁当のおむすびは必ず丸。そこには、「おむすびが転がる=漁が転がり込む」というようなゲンかつぎがあり、「丸は必ず元に戻る=航海の無事を祈る」という願いもありました。

## 4 高齢化が進む地域をどう育てていくのか

そういう家に育って、私は子どものころから、実は「何か生きにくいなあ」という悩みをずっと心に抱えてきました。

### ◇震災を機に「家制度」が崩壊しはじめた

私たちの地域には、これまで儒教的な考えに基づく「家制度」が強く残っていました。家督の役割、家業を次ぐことが優先され、冠婚葬祭は本家が統括してやるもので、すべてのことで「家」に縛り付けるような教えがありました。

震災が起こって一番変わったことは、それを機に、「家制度」というものが突然崩れはじめたことです。もとは多世代で住んでいたのが、仮設住宅では、お祖父ちゃん・お祖母ちゃんだけの家族、あとはお父さん・お母さんと子どもだけの家族というふうに、分かれて住み始めました。このことが、家族のつながりとは裏腹にあった「家」というものによる束縛に、人々が気づく機会にもなりました。「なんだ、みんな無理してたんだ」と、震災後に私自身も自覚し、解放された気分にもなりました。

### ◇地域活性化支援員としての活動のなかで

この地域の活動で困ったことは、この地域の人々には、誰かがすべてを統括していくという「他力本願」の思想が強いことです。それは結局、自分からは何もしないという姿勢でした。これは、私にとって対応に困る大きな課題でした。

地域活性化支援員として活動し始めた私は、まずは地域の現状を具体的に数字に表して伝えてみることから始めました。

人口約5000人のこの地域では、①平成13年を100とすると人口は約45%減少、②高齢化率は約37%、③公営住宅入居者の約65%が高齢者、④高齢ドライバー率は約58%、⑤基幹産業の水産加工業の復旧率は電力ベースで約82%、⑥地域によっては日中高齢化率約78%。これが地域の現実です。

とはいえ、数字だけではわからないのが実際で、悩んだ末に、今は地域を消して見せることにしています。地図の上で、1年するとこの地域は消え、5年するとここもなくなって面積が縮むという表現で、「地域の見える化」に努めています。

### ◇自立していくためにできることを支える

私は、「支援というのは、自立していくために何ができるかを支えていくこと」だと思っています。この「自立」への取り組みとしては、①時間軸を決めていく、②意識の持ち方を変える、③支援されたい人に対して支援をあえて求める、④それぞれが交流できる人を増やし、自らがハブになっていく、⑤地域に残存する能力のすべてを肯定することが大切だと考えています。

具体的には、特にアクティブシニアの女性を中心にした「女性の手仕事つくり」に取り組んでいます。地域の女性たちの多くは高齢で、ペーパーバッグをつくったり、パン作りをしたりと、手を動かして、それをまた誰かに教える仕組みをつくり、ハブを少しずつ拡げていこうとしています。

### ◇ネガティブシンキングからの脱却が第一

気仙沼では、大人たちの多くが若い人にこう言います。「こんなとこはだめだから、学校出たら東京さ行け、仙台に行け」。こうしたネガティブな考えをすり込んでいくので、若者は高校を卒業すると、そのまま外に出て行ってしまいます。とにかく、まずは「地域をよく知ること」、それがやはり一番大切なことに私には思われました。

### ◇地域のレジリエンス(回復力)を育む

こうした閉鎖性を脱していき、開かれた関係性のもとで地域を考えていくために先日試みたのは、地域の人たちの意識調査でした。例えば「この地域では祭りが必要ですか?」とか、「どのような美化活動をしたらうまくいくと思いますか?」というような内容で、学区全体でアンケートを実施しました。

結果は現在集計中ですが、たぶん、年をとっているから行事を減らしたいという声が多く出てきそうです。そこで逆に機会は減らさず、機能を高めていける仕組みがないかと考えています。例えば運動会に防災訓練を入れる、祭りで地域のおじいちゃんおばあちゃんの顔を覚えてもらう。また、料理をつくるのなら、炊き出し訓練にもなるようにする。こうしたことを今は地域のいろいろな機能を残存させながら進めていきたい。

地域のレジリエンスを助ける支援として、私が実現していこうとしていることの中心は、①女性のネットワークの構築、②キーパーソンの選定と育成、③次世代を巻き込むための仕組みづくりです。

キーパーソンの選定と言っても、それは優秀な人、中心になれる人を選ぶのではなく、選ぶのはフツー※の人。その周囲にサポートできる人を置くかたちにして、ネットワークをつくる。その人と周りの人たちを共に育てていくことが地域の回復力につながるのではと期待しています。

※「フツー」の表記は、「普通」もあれば、あえて「不通」もあっていいという考えから。

## ■会場参加者をまじえての質疑応答

### ◇独自性のある文化をどう残していくのか

**会場1**　家族のかたちが変わるとともに、食文化を含めて地域文化の独自性が失われていくのではないかと危惧されますが、いかがでしょうか。

**吉田**　記録には残しておこうとは思いますが、継承ということでは、従来のかたちでは難しい面があります。住まいが高気密になると、お餅を干す場所がない。また餅を搗く回数も減り、今はお餅もそんなには食べません。お正月の飾りも、新しい住宅ではリース型に変わってきたのが現実です。もうひとつ、高齢の方からよく出るのは、「神様は私たちがどれだけ信仰してきても、震災からは守ってくれなかった」という言葉。「せめて、起こるなら教えてほしかった」というのは、人間の悲しい言い分でしょう。でもそれが故に、神様を信じる力も薄れてきたというのもあります。

**会場2**　それでも、気仙沼で今後も残していきたいと思われるものは何でしょうか。

**吉田**　復興住宅の設備に気仙沼型のモデルが3つあります。まず、神棚がある。また、2.5人用の広いバスタブがある。3つめが、カツオ1匹が捌ける大きさの流しのシンクがあることです。

これについては、実は、3年ほど前に気仙沼の朝日新聞の記者にスーパーでの定点観測をお願いしたことがあります。というのも、震災後に高齢の方を中心に、ごはんを自分ではあまりつくらなくなったんです。お店でお総菜が買えるので、いくら大きなシンクを備えても、カツオを捌く人もサンマを捌く人もいない。

その記者の記事は、気仙沼は、食、スローフードのまちとして日本で認められているのに、このまま魚を食べなくなっていったのでは、それは復興とは言えない、という内容。私も同感でした。

気仙沼では、地域の食文化を大事にしてきたはずなのに、それができなくなってきた現実がある。従来の文化をすべてそのまま継承しなさいと言われても私自身も無理ですが、自分たちの生活基盤を支えてきた水産に関わるものはできるだけ残していきたい。それが気仙沼の本来の復興だろうと思っています。

### ◇孤立化の問題にどう取り組むのか

**会場3**　気仙沼では孤立化の問題はどうでしょう?

**吉田**　86歳の自治会長さんが最初に掲げたのは「ひと声運動」でした。今は、特に独居の男性に、女性から声をかけてもらうようにしています。「おはよう」とおばあちゃんに言われたら、おじいちゃんも「おはよう」と言う。自治会の中に女性部をつくり、その方たちがキーになって運動を進めています。

**会場4**　Iターンなど、支援にきた若い人の中からは定住者が出てきているようですね。

**吉田**　唐桑地区で活動している若者たちがそうです。元々ボランティアで入ってきた人もいれば、仕事としてやって来てそのまま定住している人もいて、「何がいいの?」と聞くと、「人と土地がいいんです」と。市の真ん中に出るのに車で約30分。その不自由さが自分たちにとっては、今の自由なのだそうです。

### ◇気仙沼の基幹産業の将来展望は?

**会場5**　気仙沼の基幹産業である水産業が、将来的にも成り立っていくのかが気になります。

**吉田**　カツオ漁などでも年々漁獲量は減っています。養殖漁業に関しては、地域で振興もしてもいるのですが、そもそも漁業に対するイメージが悪く、自然が相手の仕事のうえに、一人前になるまで5年10年が必要ということなどを踏まえると、将来的になかなか難しいところもあるようです。

### ◇何を伝え、風化とどう向き合うのか

**会場6**　震災後は、常に風化との戦いだと言えます。また、外の人に何をどう伝えるのかも課題ですね。

**吉田**　風化は、止められない現象だと私も捉えています。地域を私たちの手で守っていき、次世代に渡していくことが、自分たちができる新しい語り部の作業かなと感じています。外の人への伝え方では、発想の転換なのですが、今は高台移転の場所にお連れして、真向かいにある、きれいになった市場を見ながら、震災があって、火事に焼かれた地域もこのように復興してきているのを見ていただくことにしています。これが恩返しかも知れないと考えています。

### ◇だめなものこそ資源として活用したい

**会場7**　地域の新しい産業としては何かイメージはありますか?

**吉田**　市では、今後は観光にシフトしたいとの考えがあり、魚ではメカジキに着眼していこうとしています。私は、逆にだめなものを資源にできたらいいなと思っています。高齢化していく地域を資源としてあえて活用できないかと。交通が不便な私の地域で、一番高齢の人が96歳で現役の漁師さん。また、86歳で木船をつくっている方もいます。ここは、そういう元気なお年寄りが活躍している地域で、人生100年を見据えた最先端を行っている(笑)。鹿折でもアクティブシニアの活用だったり、共助の関係性の見直しだったりとかで、高齢者の存在がビジネスになるような、またお金がかからない仕組みをぜひつくっていきたいですね。

### ●後日、メール等で届けられたご意見・ご感想の一部

- 久々に目の醒めるような衝撃的なお話。
- 「実際、地域文化の継承はできない」と毅然と話される姿に、現在の東北の有り様を感じた。
- 吉田さんの「神様は自分たちを助けてはくれなかった」という言葉には、思わず息をのんだ。
- “伝統文化”の現代での弊害や不具合や不便を打ち破り、吉田さんは、新しくまちの“生活文化”を今、ストラグルされている。
- 精神的な「復興」にはまだまだ時間がかかることを実感。こういうときに女性の気持ちや団結力の強さを感じる。
- 人口減を示すのに、地域を消して見せるとか、残存能力の肯定や支援されたい人に支援を求めるとかは、すごい実践論。
- 「リーダータイプでない人をあえてリーダーにする」は、企業の組織論、リーダーシップ論としても立派に通用する。
- 吉田さんの「不便を資源に」「高齢化をビジネスに」の提言に感銘を受けた。
- 「不便」や「困りごと」を前向きにとらえてチャンスに変えようとする方々が新しい文化を築く。
- 人口減少と高齢化が加速するなか、アクティブシニアの生きやすさや健康、地域の循環にまで視野を広げておられるのに感銘を受けた。